

---

# お化け屋敷の裏側

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お化け屋敷の裏側

### 【Nコード】

N7258M

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

科学館で催されている企画展「お化け屋敷で科学する」を訪れた大学生カップル。いつの間にやらお化け屋敷の裏側に入ってしまった、出口を求めてさまよっていると……。 (こちらはお気楽ライトバーションです)

## （前書き）

（＊現在うちの地域の科学館で開催されている「お化け屋敷で科学する」を舞台にしています。去年東京でやっていた物なんでしょうか？ バリバリネタバレなので、これから見に行くのを楽しみにしている方は後で読んでください）

その家の前には黄色い薄暗い街路灯の灯る木製の電柱が立ち、今はもう使われていない古い番地のプレートが打ち付けられている。

目の高さよりちょっと低い位置に、尋ね人の張り紙がされている。風雨にさらされ、すっかりひび割れて白い毛羽立ちが固まっている。白黒の顔写真はまともに判別できなくなっている。

男性ではあるらしい。

名前はかろうじて「佐藤」とだけ読める。

.....

県立自然科学館で「お化け屋敷で科学する」という企画展が開催されている。

大学生の透（とおる）はカノジヨの真美と見に来た。昨日土曜が初日で、月曜祝日で3連休の真ん中の日曜はすごく混んでいる。

透は子どもっぽいお化け映画が大好きで、この企画展は去年東京でやっていたものをテレビで見て、面白そうだなあと思っていたものがこの地元の県立科学館にやってきて、大喜びで彼女を伴ってやってきたのだ。科学館に来るなんて小学生の時以来およそ10年ぶりだ。

30度を超える暑さを涼しいところでやり過ごそうとお昼を食べてからやってきたが、地方で本格的なお化け屋敷なんてないこともあるのだろう、企画展の入り口の廊下はずらりと列が伸び、入場まで30分待ちだという。しかし後からも続々人が来るようで、透と真美は仕方なく列に並んだ。

案内の女性スタッフからパンフレットをもらった。

「マル秘調査資料」と銘打たれた黒と灰色の二つ折りの物だ。

開くと家の見取り図が現れ、黄色いメモが貼り付けてある。この中古住宅の以前の持ち主に関する報告だ。

・家主：佐藤 徹さん

・昭和28年7月行方不明

佐藤さんは当時40歳

・当時母親は病気がちで、

佐藤さん不明の1年後死亡

透はちよつとギョツとした。

案の定真美が、

「あーらま、あなた行方不明だってえー」  
と面白がって言った。

透の名字は佐藤だ。名前も字は違うが同じ「とおる」だろう。

透は眉を寄せ、

「うっ、やべえ、俺、呼ばれちゃったのかなあ？」

と、怯えた顔で真美をぬうつと下から見て、

「やだ、バカ」

と気持ち悪がらせて、アハハと笑った。

「いいねえ。雰囲気盛り上がるじゃん？」

「透ってこういうところガキだよな？」

「せっかくお化け屋敷に遊びに来たんだ、怖がらなくちゃ損じゃん？」

「まあね」

と言いながら真美は全然怖そうじゃない。クールな女で、つまらないというわけでもないんだろうが、もうちよつと女の子らしくかわいく怖がってもらった方が彼氏としては盛り上がる。

列は少しずつ進んでいく。その間退屈させないように壁には白黒の「心霊写真」が張られている。

男性の肩に骸骨の手が透けていたり、木の影が重なって人の顔ら

しく見えていたり、この科学館なのだろう夜の廊下を人魂のような白い筋が浮遊していたりする。

前の小1くらいの男の子がしきりと父親にあればなんだこうだと一生懸命「種明かし」をしている。透はクスツと笑った。怖いのをおしゃべりで誤魔化しているのだろう。透は自分と真美の間に同じ年頃の子どもを想像してみた。女の子もかわいいだろうけれど、やっぱり男の子の方が父親としては嬉しいかなあ…なんて。

ようやく入り口前に辿り着いた。この展示は、「科学する」というテーマで、最初にパンフレットの中古住宅の「お化け屋敷」を体験し、抜けると、怪奇現象の科学的種明かしや人が恐怖を感じる精神的な仕組みを解説する展示があり、怖がらされたお化け屋敷を裏側から後のお客が怖がる姿を覗き見る、という構成になっているらしい。

さてどれほどのお化け屋敷なのか？、子どもつぱい透は大いに楽しみだ。ちゃんとスタッフが中の進行具合を見て、次のお客をお化け屋敷の「ドア」に誘導している。

前の男の子と父親がドアの前に進み、透と真美は企画展のチケットをもぎりの女性スタッフに渡した。

「三名様でよろしいですか？」

「え？…」

「冗談です。もうしばらくお待ちくださいーい」

黒のドレスに白いエプロンの乗りのいいゴスロリメイクのお姉ちゃんだ。

それではどうぞ行つてらっしゃい、と前の親子がドアを開けて入っていった。

ドアの前には木製の電柱が立ち、黄色い薄暗い街路灯がつき、尋ね人の張り紙がある。

真美が張り紙を指さして面白がった。

「ほら、搜してるって？」

透はニヤツとせいぜい不気味に笑ってやった。

中からドンツという音と子どももの甲高い悲鳴が聞こえてきた。しばらくしてまた何か物音が。しばらくして、

「それでは、どうぞ、行つてらっしゃい」

とスタッフにドアを開けるよう促された。手をノブにかけた透はふと振り返った。

乗りのいいゴスロリのお姉ちゃんが、

ニコッ、

と笑い、

「どうぞ、お氣をつけて」

と言った。

透と真美は、ドアをくぐり、家に入った。

黒のカーテンで仕切られた四角い廊下を進み、突き当たりの黒いカーテンをめくると、ドアの開いたトイレが見えた。先に進むにはその左手のカーテンをくぐらなくてはならない。

歩いていくと、トイレは和式で、どうやら昔懐かしい「ボツチャントイレ」…大の用を足すと下から水の跳ね返りのあるくみ取り式トイレ、らしい。

暗い灯りのトイレに更に近づいていくと……

ダンツ、

と突如トイレの中から、ガッ、と指を開いた手が飛び出してきた。

「うわあっ」

と透はのけ反った。

真美はキヤハハハ、と大笑いした。

「あんたマジ〜〜?」

「うるっせえな〜、おまえも怖がれよお〜」

と透はすねたふりをしたが、まあ、予想通りだ。しかし、怖がら

なくちゃつまらないじゃないか？

左手のカーテンをくぐると、

テレビのある居間だ。これまた年代物の画面が球面に盛り上がったブラウン管テレビで、サイドボードにはラジオや、写真立てなどがある。

パツと暗さに慣れた目に虹色の光彩が差し込み、突然ついたテレビの画面に、大口開けた女の顔が大写しになり、

「あはははは、あーははははは、あーはははははははははあ」

と、不気味な顔と不気味な声で大笑いした。

「うわー、次行こう、次」

真美に急かされ透は次のカーテンをめくった。

台所だ。

炊事台にまな板や包丁が置かれ、そのどれもが黒ずんでいる。

傍らに洗濯機も置かれ、それが突然ガタガタと音を立てて揺れだした。

「まあ、怖い。行きましょ」

次のカーテンをめくる。

ここは、細長い廊下のようなのだ。

真っ暗で何も無いようなので進むと、

「あーっははははは、あーははははははははは」

テレビの女の顔が向こうの空中に浮かび、なんと、半透明の光の顔が、こちらに向かってさあーっとう宙を飛んできた。

わあっと透は驚いて黒い壁に張り付いた。女の顔はさあっと目の前を通り過ぎ、後ろの壁に大写しになると、

「あはははは、あーははははははははは」



と不気味に笑い続けた。

「まあっ、飛んできたわね？　すごいわあ。さ、行こ」

廊下の先へ進んだが、

あれっ？、

と、透は迷った。正面のカーテンと、右手のカーテンと、どっちに進めばいいのかわからない。

どっちか迷った透は、

「こっちでいいのか？」

右手のカーテンに進もうとしたところ、ハッと、手が止まった。その、更に右隣の、カーテンの下がった黒壁であるべきところが、カーテンの端の隙間から、暗く、人の顔が覗いていた。

透は、ギョツとした。

顔は透が驚いたのを見て、すぐに消えた。

「どうしたの？　こっちでいいんでしょう？」

真美に言われ、

「あ、ああ。こっち」

と、カーテンをくぐった。

透は、

『フッフ』

と心の中で笑った。さっき覗いた顔、あれは仕掛けではないだろう。きつと裏から様子を見ていたスタッフが、お客である透に見つかって、慌てて顔を引つ込めたのだらう。

なーんだ、途中でもう「裏側」が見えてしまって、透は可笑しくて、怖がるどころではなくなってしまった。

次なる部屋は物置だった。

そこは、二体の裸の女のマネキン人形が立ち、棚に薄汚れたフランス人形や、子どもの人形がごちゃごちゃと置かれていた。

「人形って、あるだけで不気味ね」

と真美が言った。

しばらく眺めたが、どうやらここは不気味なだけで特に仕掛けはなく、その不気味な静寂を恐れながら、カーテンをくぐった。

狭い部屋に出て、明るい光の漏れるカーテンを開けると、明るい展示場に出た。

お化け屋敷パートはこれにて終了だ。

「ふうーん、もうおしまい？　まあ、なかなか面白かったじゃない？」

クールに言う真美を横目に見て、透は『フッフィン』と笑った。

「おまえさあ、本当はけっこうびびってたんじゃない？」

「はあ……？」

真美は眉根を寄せて透を睨んだ。

「んなわけないでしょ、あの程度で？」

「へえ……？　そーお？　それはそれは、お見それいたしました」

透はニヤニヤして、真美は『なによお』と横を向いてふくれっ面をした。

パネルで怪奇現象の仕組みが解説されていた。透は、

「へえー、あれ、ブロッケンの怪物って言うんだ」

と感心した。空中を笑う女の顔が飛んでくる仕掛けだ。あれはいかにも科学館らしい不思議現象の再現で、面白かった。どうやら霧と光の関係によって生まれる現象らしい。

パネル展示の他に自分の顔が左右反転しないで見える鏡などがある。なるほど、見慣れた像と違って変なものだ。

さて。

この企画展示の目玉、

お化け屋敷の裏側に回って、後のお客さんを脅かす役の出来るコーナーに来た。

係のスタッフに、前の男の子と父親が黒いカーテンの中に招かれ、

何かして、向こうで「キヤーツ」と悲鳴が上がる。隣のカーテンを開いて出てきた男の子は嬉しそうに思いっきりニコニコしていた。

「次の方、どうぞ」

招かれて、透と真美はカーテンの中に入った。

狭い小部屋で、前の壁に小さな四角の覗き窓がある。スタッフのお兄ちゃんが説明する。

「お化け屋敷を通つてくるときに台所で洗濯機が動きましたよね？」

実は、この裏がその洗濯機になっていて、この紐で

と、天井からぶら下がるロープを指し、

「揺すって動かしていたんです。今次のお客さんがカーテンを開けて入ってきますから、この前に来るタイミングを見計らって、この紐で洗濯機を動かして脅かしてください」

とイタズラの相談をするように説明した。

「よし、リベンジしてやろうぜ？」

透は真美といっしょにロープを握り、二人で顔を寄せて小窓を覗き、お客を待った。

向こうのカーテンを開け、ちょうど自分たちのようなカップルが入ってきた。奥のキッチンを気味悪そうに眺め、順路に従ってこちら向かって歩いてくる。

「今だっ！」

透は小さく叫び、真美といっしょにロープを引いた。ロープは案外重く、力を入れて引っぱると、

ガタツ、ガタガタガタツ、

と洗濯機が動き、カップルは

「うわっ」

「きゃっ」

とビクツと身を引いて悲鳴を上げた。

なるほど、人を脅かすのって、たーのしいなー。

カップルが行ってしまい、

「はい、ありがとうございました。大成功です」

スタッフに誉められて、透は意気揚々と出口のカーテンをめくった。

真っ暗だった。

『あれ？』

透はグルツと見回した。狭い、細長い所に出てしまった。間違えて変な横つちよに抜け出てしまったようだ。

「え？ なにここ？ 違うじゃない？」

後ろにくつついてきた真美も戸惑った声を出した。

「なんか間違えたみたいだな？」

透は真美の背後のカーテンを探って元の小部屋に戻ろうとしたが、探しても、カーテンの裏は硬い板が続いていて、出てきた場所が分からない。そんなに何歩も動いていないし、後ろには真美もいるのだから、出口はすぐその近くにあるはずなのだが、どうしても分からない。小さな声で

「おーい、スタッフさーん」

と呼びかけてみたが返事はない。いつの間にか向きが変わってしまったかと反対側に手を伸ばして探してみたが、やはり硬い板が続くばかり。

おつかしいなあー……と首をひねり、さてどうしたものかと思案していると、壁の向こうで

「きゃあっ」

と悲鳴が上がり、ギョツとしたが、

「きゃあっ」

とこちらでも真美が悲鳴を上げて腕にしがみついてきた。

「おいおい、大丈夫だよ。ここはお化け屋敷なんだからさ」

そう、壁の向こうはお化け屋敷で、新しいお客さんが何か仕掛けに脅かされたのだらう。だが真美は暗いところに閉じ込められて、面白がっていられる状況ではないようだ。

「だってえー……」

と腕にすがりつく真美は、やっぱり内心ではけっこう怖がつて、強がっていただけなのだろう。

「大丈夫だよ」

透は真美のしがみつく手をポンポン叩いて安心させるように言った。

「どうやら本当のお化け屋敷の裏側に出ちゃったみたいだけど、どうせたいして広いお化け屋敷じゃないんだからさ、出口は他にもあるよ。むしろさ、ラッキーじゃん？　取りあえず、先へ探検してみようぜ？」

「うん……」

真美は大人しく言うと、腕から離れ、代わりに透のＴシャツの裾を握った。

「よし。じゃ、行こうぜ？」

透は優しく言いながら、内心では『けっこうかわいいじゃん』と真美の意外に女の子らしい一面に喜んでいた。

取りあえず、こっち、と見当を付けて細長い先へ進んだ。

進んでいくと、上の方のカーテンの継ぎ目からライトの光が漏れ見え、「あははははは、あーっはははははははははは」とけたたましい女の笑い声が響いてきた。壁を作っている板が天井までなく、上の開いた部分でわずかにカーテンどうしの重なりに隙間があるのだろう。向こうから「わあっ」と驚く声がして、女の笑い声とこの光の感じから『ああ、顔が飛んでくる奴だ』と分かった。

確かこの先が物置で、そこを抜ければもう出口だったなと思い出しながら、このまま先へいっしょに進めるのかな？と先へ進んだ。すると、ふと、男の横顔が現れて、こちらに気付いてギョツとした顔をした。

男の顔はすぐに消えた。

はて？、と透は考えた。もう笑い女の映写も終わって真っ暗になってしまっって何も見えないが、どうやらここは板と板が重なって細い隙間を作っって、まっすぐ角度の合ったほんの短い距離でだけ向こ

うの景色が覗けるようだ。

透はお化け屋敷を回るとき自分がここで見た不気味な顔を思い出  
し、なんだ、あの顔も自分と同じように裏側に迷い込んだお客だっ  
たのか、と苦笑いした。

多少不安に感じていた透も迷ったのが自分たちだけじゃないと分  
かってほっとした。

「だいじょぶだいじょぶ、行くよ」

後ろでぎゅっとＴシャツの裾を握りしめる真美に声を掛け、透は  
先へ進んだ。

右手へ曲がり、少し進み、また右手へ曲がると、少し広いところ  
へ出た。

向こうからはなんの音も声も聞こえない。人形たちのいる物置だ  
ろうか？

先へ進んで出られるのかな？と伺った透は、床に目をやりギョッ  
とした。

裸の人形が転がっていた。

ドレスとかつらをはがされたフランス人形らしい。暗い中でもな  
んとなくひどく汚れているように見える。

なんだろう？ 壊れて、展示から外したのか？ いや、表の物置  
にも壊れた人形は展示されていたと思う。人を怖がらせるための人  
形なんだから、壊れて、汚れていた方がいいだろう？

透は、片足をカーテンの裾に隠し、うち捨てられたように手足を  
不自然に投げ出し、首を「クリッ」とこちらに向け、暗く青い瞳を  
光らせている人形にゾツとしたものを感じた。

「行こうか」

透が先へ進もうとすると、真美の手がＴシャツから離れ、

「真美？」

真美は先へ歩いていくと、しゃがみ、床の裸の人形を拾い上げ、  
大事そうに胸にぎゅうっと抱きかかえた。

「真美？ なにしてんの？」

透は真美の背中に声を掛け、肩を押さえた。

「ほら、行くよ？」

しかし真美は透の手を払いのけるように首を振ると、人形を抱え込んでますます背中を丸めた。透は、不安になった。

「どうしたの？ 人形、置きなよ？ ほら、行こう？」

真美は、人形を抱えたまま動こうとしなかった。

透は困った。

「それはここの備品のはずだからさ、真美の物じゃないんだよ？

さあ、元に返そう？」

しゃべりながら透は自分は何を言っているんだろう？と思った。

まるでオモチャ屋で気に入ったオモチャを抱えて放さない幼い子どもに言い聞かせているみたいだ。

「なあ、真美……………」

透は、なんとなく、彼女の丸まった背中が怖くなった。

ふうつと、

白い光が瞬きながら宙を走り、

なんだ？と顔を上げかけて、ハッと、彼女に目を戻した。

ゾツとした。

こちらを見上げて、睨んでいる。

白い不安定な光に瞬く彼女の顔は……、

真美には、見えなかった。

「だ……、誰？……………」

じいつと睨んでいる怖い目。

切れかかった蛍光灯のように暗く白く彼女の顔を照らす光。

透はそうつと視線を上げた。

ふわふわと、宙を白い人魂が漂っていた。

透はどういう仕掛けになっているのだろうと思ったが、

彼女が立ち上がると、胸に壊れた裸のフランス人形を抱き、頭上

に白い人魂を漂わせながら、

透を見下ろして、

「あはははは、あーっ はははははははははは」

と大口を開けて笑い出した。

透は、ぺたんと尻をついた。

「あははははは、あははあははははは」

狂ったように笑い続ける女は、抱いていた人形を両手に持って透に突き出した。

抱いてあげて、

[illegible]

「あはははははは、あはあははあはははははは」

透は、

「ひいーっ」

悲鳴を上げて這いながら女の隣をすり抜けて、立ち上がると、

「うわあああつ！」

大声を上げて、目の前の黒いカーテンに飛び込んだ。セツトを壊して怒られようが弁償させられようがどうでもいい、どうでもいいから、誰か、

「た、助けてくれえーっ！！！！！！」

両腕で顔をかばいながら飛び込むと、バサツとカーテンが腕にまとわりついて、分かれ、透は次の空間に飛び出した。

「あつ」

「うわあっ」

「わああっ！」

三つの悲鳴が重なった。カーテンから飛び出した透はお化け屋敷を回っているお客のカップルに鉢合わせしたのだ。

「え？　なんなの？　これも演出？」

驚き困惑する女性。

「あ、いや、その……」

透が説明に窮すると、後ろで明るい光が射した。



「どうしました？　ここでお化け屋敷はおしまいですよ？」

カーテンを開いて科学館の制服を着たスタッフが覗いていた。

「た……助かったあ……」

透はとにかく明るい光の下へ飛び出ると、はあ……、と息をついて座り込んでしまった。

「ああ！　ちよつと透ー、あんたどこに消えてたのよ？」

真美がプンプン怒ってやってきた。ゴスロリメイドの切符切りもいっしょだ。彼女は

「突然消えたというので捜していたんですよ？」

と首を傾げて透の顔を覗き込んだ。

「消えた？……」

「そうよお！」

真美がプンプン怒って言う。

「仕掛けの部屋から出たら、あんたいないんだもん！　先に出ちゃったってほど離れてなかったし、スタッフさんに訊いても一人で出てきた若い男性はいないって言うし、いったいどこに行っちゃったんだろうつてみんなで捜したんだよ？」

「みんなで？」

透はほつとしてニコニコ見下ろしているスタッフやニヤニヤ笑っているお客たちを見回した。

「そ、それが……」

透は格好悪く立ち上がり、中での出来事を話した。

ゴスロリメイドは首を傾げた。

「ここにそんな通路ないですけど？」

と、証拠を示すように透を連れてあの洗濯機の裏側の小部屋に入り、ペンライトで照らしながら、

「ほら、どこにも裏側に行けるような穴なんかないでしょ？」

とカーテンをめくって木の板を見せた。たしかに、こちら側から入って、出るだけで、正面にも左右にもその向こうへ抜け出られる

ような穴や隙間はないようだ。

おっかしいなあー……、と透は狐につままれたような気分になった。

ゴスロリメイドは明るい照明の下に出るとかわいい顔で笑ってこともなげに言った。

「お化け屋敷には本物のお化けが寄って来るって言いますからね。でも、

大丈夫だったでしょう？」

お化け屋敷のお化けは、お客さんに直接触れないのがルールですから」

透は、一番最初に抱きつかれたがなあー、と思ったけれど、彼女の手前それは内緒にしておこうと思った。

おわり。

（後書き）

（＊一部意図的に仕様を変えております。残念ながらスタッフさんにゴスロリメイドさんはいません）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7258m/>

---

お化け屋敷の裏側

2010年10月8日13時06分発行